

印刷業を弟とはじめ、 130年の歴史が 幕をあげました

繊維の街・大阪船場の地で1896年（明治29年）に曾祖父・中許栄之助がレッテル・引札・ラベルの印刷・漆看板制作をする「ヤラカス館」を創業したのが当社のはじまり、来年で創業130周年をむかえます。レッテルとは「ロゴマーク」繊維商品の顔といえるもの、引札とは当時の宣伝印刷物の中心、現代でいう「チラシやビラ」のこと、そこから時代にあわせ印刷、デザイン、販売促進企画、マーケティング企画と提供するサービスは変化してきたのですが、根底にあるのはお客様のブランディングを磨く立場であること、そして創業理念である「なんでもヤラカス精神※」の哲学継承です。現在はリブランディング・DX・セミナーなどのコンサルティングを中心とする会社に進化しています。わたしは38歳で4代目社長に就任し68歳まで30年間会社の指揮をとりました。9年前に娘婿である中許将一に5代目社長を譲り、いまは会長の立場で会社をみまもっています。

※ヤラカスとは「なんでもやりこなす」という意味。やらかすとは「家良嘉寿」家が良くなり喜び寿ぐ、また「弥栄加寿」いよいよ楽しく良き年を加える、との意味もある。

中許家の先祖は豊臣秀吉の家来のなかでも武功の者として選抜された精鋭である七手組頭の1人、中島式部少輔です。秀吉の死後も豊臣家に仕えていたのですが、大坂夏の陣で兵2,000を率い奮戦するもやぶれ自刃に追いこまれ、中島家をのこす為に弟を丹波篠山に逃がしました。その後、中島家は酒屋を

営んでいたのですが創業者・栄之助の祖父である中島栄七が妻・中西トメと結婚し大阪に出てくることになりました。この大阪行き、2人は駆け落ち、そんな状態でしたので中島姓を名乗る事ができなかったのです、そこで中を許すという想いで中許姓を名乗りはじめたのが家名のはじまりです。そしてその後、もともと印刷機械職人をしていた栄之助が事業の立ち上げを決意し印刷機を1台購入、印刷業を弟とはじめ、130年の歴史が幕をあげました。印刷だけにとどまらず、漆看板をしたり今でいうイベント業をはじめたり事業は拡大していきました。親交があつたのが伊藤忠商事の創業者・伊藤忠兵衛さん「中許はん、これから日本の繊維産業は大きくのびませ。ヤラカス館も繊維に関する印刷の仕事に力をいれなはれ」そこから繊維企業のレッテルや包装紙などを取り扱うようになりさらに業績は伸びていきました。

3月14日すべてが なくなりました。 大阪大空襲です

しかし昭和20年（1945年）3月14日すべてがなくなりました。大阪大空襲です。当時の社長は父・忠夫、空襲の翌朝会社に行ってみると建物もすっかり焼けて、外壁が残っているだけ。さらに6月の大空襲で2つの工場が全焼しました。残ったものは今里工場と疎開していたわずかな機械類。しかしつぶしてしまるか〃の想いだけで、日本の無条件降伏文書の調印式がおこなわれた9月2日をヤラカス館の復興記念日として、復員してきた7名の従業員とともに手分けしてどこにでも飛び込み、大阪・京都・神戸

地位・名誉・待遇・給与だけでは人は動かない

